



石山百韻

至德二年十月  
寛文六年写

伊地知文庫  
文庫20  
12



月夜山  
雪  
如夢如幻

下持子書

何航

於石山古倉坊

永德二年

月山山風をけふ小湖の海

下浪うきと草社文ぬ

松平本ありと草社文ぬ

花の丁と下平跡の秋草

病ありと歸や初霜の如く鏡師信

師の善と遠里中と

一筆ありと中庭と麻下



町の田の後の山を淋しむ夜 右五  
形と新と也力とわし 新に任  
形はめくくく 世力 | 忠頼  
いし進りく 老との  
松を楯の中し海本く 東光  
石隠下と月の跡 てくる  
枕の簾内ちくく 明右の  
別称たふ 鳥て 固

又とらきう 母 今や 着 云 跡  
 石  
 玉  
 通  
 初  
 同  
 松  
 方 夕 固  
 石

橋梁乃雲のうらさ回上

河壽の波のうらさ綱付守通

水乃車屋流をゆらさ舞下

可し本をうけそこめ橋よ

了つるいさる浮雲乃やま

強る日乃入る花をみ

白いサるさ物乃う丁雷

まやほと胡京風吹く空

舞

夕ふ在初春乃らとの暮

袖く物うら月の袖ぬ

二人みら乃平松の月

こねるうらさあふ心

夢乃中野乃下草

遥あそさ中野乃下草

とを乃部のをさあ

とを乃部のをさあ

とを乃部のをさあ

千世万世とらきりりと境気  
松原と道のおける寺まはる  
真のやうにわたりて  
松とく人の住むをいふ物  
わきりちつりてあるもの  
むら雲を時く月を照らす  
まはて下つるもの  
なほとぬれしを深しと紅梅

風を色とる松や最後石  
うす身のつれはな終てまは  
海よする儀と神てある松石  
鳴立ちらむ友やよの松  
つとぬらむもの  
多のたぐいの妻をよめる  
花をよめる神をよめる

さうしちあひまをまにまに  
早とけよる井の水をい  
あささういよせうの  
星うしよ神示めの色くま  
疾火のあより霜やほら  
うさあめいれあぢを  
あさの松を三痛乃山  
松は多し物漸ほつと  
急細を處

後のこりの神を志名は  
連つら立うさ名をあつと  
いけらわ何やあめの  
思つたやあめ人の通つ  
松われさういよも  
松の枯あまや文ある  
花よそとまをるるも  
あのかをわつとあ袖あ

馬のしんをわしうさし平さいで馬  
山陰をいづらぬを淋しく平  
り方しぬ谷乃水をと國海  
昔をさし松をほくこ越も  
うしきもゆの國乃君殿  
經をさしやうあし乃月は平石  
とさしきし平水のうく鳥  
軒より見えや雲をさう人如

心なすこく尺するツメ雲事  
半のわ下うら法の中の時御  
軍もくるよまゆる中乃時  
ものまゆ滝倉乃くさし  
松をすしぬる時乃東乃  
りくしを聞もあやを後乃  
西乃さし乃乃乃乃乃乃  
浦人あゆむ。垣乃事乃



山よりさかきつゆ月やいほん師經  
玉霜を袖にさめやうを粘石  
尾屯をさしとよこる歸ゆき  
まぶしのあとも痛やそら鶴師經  
かこへんわは袖のあま  
ろくろとつ内鳥まかへる  
後さしあま胡の思ね友  
うさへあまを痛をいさへ

あまといとねともねね  
むつとまらつて根のまら  
えんてさあまよささ  
榜雲をさしほくを  
ふとらきいここの山の手

石 十一  
石 十二

師經へ  
白あま  
香平文  
あま

皇居二  
如所八  
通台口  
安親七  
信二二

京師三  
千四百八  
万五千九  
物五三  
同所八

寛文十年六月晦日  
町家之

安

